



Contents

- 2024年度チャペルサービス
学生・教員による奨励、礼拝奉仕の感想
- キリスト教講演会（後期）
他者と共に悩むー
日本とアジアの「狭間」^{はざま}での経験から

カイパー記念講堂のステンドグラス：「良い羊飼ひ」か？「迷い出た羊」か？ 秋岡 陽（学院長）

入学式や卒業式が行われる、山手のカイパー記念講堂のステンドグラスが設置されて95年。この間、フェリスに集う大勢の人々が見つめてきた。しかしそこに描かれた絵を、何の絵と見てきたか。答えはひとつではない。

絵の中央に立つのが「羊飼ひ」であることには異論ないだろう。手にする杖は羊飼ひの象徴的アイテム。危険なサソリや蛇を追い払い、曲がった柄で穴に落ちた羊を引き上げ、羊たちを守り導く。

聖書では、人間はしばしば羊にたとえられる。迷いやすく、進むべき方向を見失いがちな羊の群れ。その羊の群れに羊飼ひが必要のように、民を率いる羊飼ひとして、神や指導者が必要と考えられた。

旧約聖書を読むと、民衆を苦しめる悪い指導者がでた話も書かれている。本当の良い羊飼ひの到来が待望された。イザヤ書40章には、やがて真の羊飼ひがあらわれ、その腕で群れを集め、小羊をふところに抱くことが預言されている。そして、その、本当の良い羊飼ひであるイエスが、今から2000年ほど前にやってきた。

新約聖書では、イエスは自身を「良い羊飼ひ」と宣言し、その羊飼ひは羊のために命も捨てると語っている。ヨハネ福音書10章の記述だ。また、羊たちは、その羊飼ひが「良い羊飼ひ」であることを知っているの、羊飼ひに従い、導かれ、一つの群れになるとも記されている。

新約聖書にはまた、羊飼ひと羊の関係を語った印象的な「迷い出た羊」のたとえ話も語られている。マタイ福音書18章の記述だ。ある人が羊を100匹もっていたが、1匹が迷い出ていなくなった。するとその羊飼ひは、99匹を山に残し、迷い出た1匹を探しに行った。そしてその1匹を見つけると、迷わずにいた残りの99匹の羊のことよりも、見つかったその1匹のことを喜んだ、というたとえ話だ。このたとえ話が

らは、小さい者や、弱い者を徹底的に大切するイエスの姿勢が伝わってくる。

興味深いのは、フェリスでステンドグラスの説明をするときに、複数の説明がされてきたことだ。95年前、1929年にこのステンドグラスをフェリスに贈ったアメリカ側の記録を見ると、ヨハネ10章の「良い羊飼ひ」にちなんだステンドグラスを日本に贈ったと記されている。ところがその翌々年、1931年に刊行された学院『六十年史』では「迷い出た羊」（マタイ福音書18章）のステンドグラスがやって来たと説明された。そしてその後「迷い出た羊」説の方が学院関係者に広まった。

ところが1984年に当時の氣仙三三校長が、ステンドグラスの原画はブロックホルストという画家の『良い羊飼ひ』と題された作品（図版）で、そもそも殉職したカイパー校長を記念する講堂なので命をも捧げる「良い羊飼ひ」と見るのが順当、と指摘する。ただ「迷い出た羊」の絵と見ることを否定することはなかった。

というわけで、カイパー記念講堂のステンドグラスが何の絵なのか。答えはひとつではない。虚心坦懐に見ると、どちらか一方に限定しなくてもいいように思う。たとえ原画のタイトルが「良い羊飼ひ」だったとしても、この絵を見る私たちには、その「良い羊飼ひ」が、「迷い出た1匹」をも大切に、探し出してくれる方でもあることを思い出すのをとめることはできない。

ステンドグラスがフェリスに贈られて95年。旧約聖書で待望された良い羊飼ひとして、小さく弱い者を徹底的に大切にする主として、自分の命を捧げてまで人間を愛すキリスト・イエスとして、今もフェリスに集う人々を見守っている。

2024年度チャペルサービス報告

緑園キャンパスでは（月）～（金）にチャペルサービス、山手キャンパスでは（木）に山手木曜礼拝を実施しています。今年度、メッセージや奏楽など、礼拝においてご奉仕いただきました皆様に感謝申し上げます。学生・教員による奨励と、礼拝奉仕についての感想をご紹介します。



「光に導かれて」 12月3日 チャペルサービス

U・Y（文学部コミュニケーション学科3年）

皆様は、聖書の最初がどんな物語か、覚えてますでしょうか？
 天地創造のお話、すなわち『創世記』です。『創世記』によると、神ははじめに天地を創造し、闇がありました。そこに「光あれ」といって「光」がでます。
 光があって闇があった、のではなく、闇があって光があったのです。
 天地創造に次いで語られるのが闇と光。多くの人は、はじめから光に灯されて、輝かしい日々を過ごしているわけではないと思います。創世記のように闇の中を生きることでしょう。そこに、神が「光あれ」といって、この世に光がもたらされます。
 それでは皆様にとっての、「光」とは何でしょうか。
 難しい問いですが、イエス＝キリストが生きた時代の人々にとって、「光」となったのが、「イエス＝キリスト」でした。その時代を生きた人々は苦難が多く、闇が広がるこの世を生きるため、預言を信じて救い主を待ち続けて、預言のとおりお生まれになったのが、イエス＝キリストだったのです。イエス自身もヨハネによる福音書8章12節で語られていますが、「世の光」であり、「命の光」となりました。もちろん今も、「世の光・命の光」として、キリスト者を照らし続けています。
 さて、それを踏まえて本題に入ります。
 私の高校のモットーは「光の子として生活せよ」でした。私は、この「光の子」ってなんだろうという疑問を抱えたまま、高校時代に終止符を打ってしまいました。ですが、今なら私はこう答えます。イエスという光に灯されて生きる人。すなわち、イエスに従う人である、と。イエスに従う人＝洗礼を受けたキリスト者（クリスチャン）というわけではありません。イエスを模範として生きるのは、自分の理想とする人間像として生きるという形に似ていると思います。言い換えると、ロールモデルのようなものなのでしょう。それがイエスに従うことであると、私は考えます。
 とある日までの私は、イエスを受容すること、イエスに従うことができていても、「信仰」まではいかないという日々を歩んでいました。しかし、そのような日々が光が灯されたのです。その転機は2023年降誕祭前夜。高校のときから毎年降誕祭前夜のミサを与るようにしているのですが、そこで、私という闇の中にぽっかりとあいた穴を埋めるように、「光」がありました。その光が、私にとっては「信仰」だったのです。年末には神父様に受洗の意思を伝え、2024年のマリアの誕生日に受洗し、洗礼名をいただき、新たに生まれ変わったその日に、あらためて、自分の光を再確認しました。
 あなたにとっての「命の光」は何でしょうか。
 自分にとっての命の光をみつめることは、とても難しいことでしょう。
 人生を通して灯され続ける光は、そう簡単には出逢えません。ですが、自然とその光に導かれているものだ、私は思います。
 「一粒の麦、地に落ちて死ななば、ただ一つにてあらん。もし死なば、多くの実を結ぶべし。」
 ヨハネによる福音書12章24節、私の理想の死に方を表す聖書箇所です。
 死に方は生き方を表すということを最近耳にしました。洗礼名も恩師のシスターに、私の理想の生き方と死に方を通して決めていただきました。これも、私にとっての「命の光」の導きでしょう。
 皆様もどうか、改めて自分にとっての「光」を考えてみてください。
 光はいつもあなたのそばに。
 神の御加護があらんことを。

「日々の感謝」 12月10日 チャペルサービス

U・S（音楽学部音楽芸術学科3年）

今週の週間主題が感謝ということで、本日は「日々の感謝」と題してお話させていただきます。
 早いもので12月も2週目となり、今年も残すところわずかとなりました。少し早いですが、もうすぐ終わる今年を、一年ふりかえり、感謝の気持ちと共に来年へ気持ちを向けていこうと思います。
 感謝をしようというときまず何に対して感謝の気持ちを感じるのでしょうか。
 ご両親に家族、友達、先生、感謝の気持ちを伝えたい人を上げていくときりがありません。
 テサロニケの信徒への手紙5：16に、「いつも喜んでいなさい、絶えず祈りなさい、全てのことに感謝しなさい」とあります。
 改めて、この聖書箇所を私なりに解釈してみたのですが、全てのことの中で、とても大切で一番見落としがちな感謝する相手がいることに気づきました。それは自分自身です。
 私はよく自分の容量を超え、パンクしそうになることがあります。少し前までは、なんでこんなに頑張っているのに認められないのかと、不平不満を考えてばかりいる始末でした。しかし、自分のことを一番認められていないのは自分だと気づくことができました。余裕がなかったり、自分の分がない人にはなにもあげられないし感謝なんてことは全然できません。決まった時間に朝起きられたとか、当たり前なことでも自分に対して頑張ってくれてありがとうと思うことで心がとても暖かくなります。自分で自分に感謝するというのは、出来や結果に関わらずできることです。当たり前の日々の中の、ちょっとしたことに、自分にありがたそうと伝えていきたいです。
 実はクリスマスに合わせて、幼稚園へ演奏をしに行くのですが、その演奏曲の中にアンパンマンのマーチがありました。アンパンマンは知っての通り頭があんぱんでできていて少しずつつぎってこともや困っている人に渡します。ですがあまりあげすぎると、元気がなくなりひとに上げられないどころか歩けない空も飛べない、ひどいと倒れ込んでしまうんですね。自分に使う力さえ無くなってしまいます。なんならまだ誰にも上げていないのに水に濡れてしまったり、たくさん聞くと同じ状況になります。そこでジャムおじさんとバタコさんの力で新しい顔にチェンジするわけです。アンパンマンでさえ、誰かに何かを与えたり、何かと戦うには新しい顔という名のエネルギーがたくさん必要です。
 誰もが一度は憧れるヒーローのアンパンマンでさえ、倒れてしまうと自分の力だけでは復活できません。私たちはアンパンマンのように世界中の子供たちを救っているわけではありませんが、ジャムおじさんやバタコさんのような、一瞬でエネルギーを満タンにしてくれる最強のサポーターもいません。支えてくれる人はもちろんいますが、一瞬で満タンに！とまではいきませんよね。

少し話がかわってきてもいいかもしれませんが、全てのことに感謝をするために、アンパンをあげるために、今年一年頑張ってきた自分自身にたくさんありがたそうを伝えて欲しいです。自分自身にたくさん感謝をして満タンになってから全力で全てのことに感謝をしていきたいです。
 「いつも喜んでいなさい、絶えず祈りなさい、全てのことに感謝しなさい」
 全てのことに感謝しない、の前に、いつも喜んでいなさい、絶えず祈りなさい、という言葉もあります。まずは喜びに目を向けられるように自分の心を豊かに、祈りを忘れず、それから全てのことに感謝するという思いが込められているのではないのでしょうか。
 今年一年、どんな年だったのでしょうか。まずは一年頑張った自分に感謝を伝えてみてください。

「生きている意味」 ～礼拝奉仕について～

S・Y（音楽学部・音楽芸術学科4年）

毎日お昼休みに行われているチャペルサービス（礼拝）に参加したことはありますか？授業の課題で数回参加したことがあるという人が多いかもしれませんが、礼拝は、司会・奨励・聖書朗読・お祈り・奏楽・パワーポイント操作をする学生や職員の方がいらっしやって、成り立っています。私は、ありがたいことに司会・奏楽・聖書朗読・パワーポイント操作・クラシックギターでの讃美歌演奏など様々な役割を経験させていただきました。これらは、礼拝に参加しているという気持ちでやっていましたが、ある時宗教センターの職員の方が「神への奉仕を行っている学生がいる」と奨励でお話しされているのを聴き、これも神様のために奉仕していることになるのだと感じました。

これまで21年間生きてきましたが、決して楽な人生ではありませんでした。人間関係でうまくいかずいじめられたことや、ストレスで感情がなくなったこと、自分の居場所を見つけられなくて、私は誰のために、何のために生きているのかを模索し、自ら命を断つことを本気で考えたこともありました。辛く苦しい記憶は、時間が経っても消えることはなく、ずっと心のどこかで抱えていくしかありません。辛くて、どうしようもなくしんどい日が続く中で、毎日が真っ暗な日もありましたが、こんな私を支えてくれる方がいたことや温かい言葉をかけ続けてくれる人に出会えて、「あと少しあと少し」でここまで生きてきました。

「求めなさい。そうすれば、与えられる。」この言葉は、私が高校3年生の頃に先生から教えてもらった言葉で、今でも大切にしている聖書箇所です。フェリス女学院大学に入学するまで、行われていた入試を全て受験し、3月中旬に補欠合格で入ることができました。いくつもの困難があったからこそ、大学では「自分が少しでも挑戦したいと思ったものは、挑戦しよう」と入学前に目標を立てました。これにより、学友会、留学生サポーター、オープンキャンパススタッフ、ボランティアセンターでの活動、聖歌隊、学位授与式での学生司会、緑園街マルシェ企画運営スタッフ、ラジオの学生パーソナリティー、入試スタッフ、学生広報スタッフ、演奏会スタッフ、フェリスチャレンジ制度、礼拝奉仕など様々な活動を行うことができました。ですが、普段の授業に加えて、色々な活動をしていたので、1人ではできないと悩み、抱えることもありました。周りを見れば下を向く私を立ち上がらせてくれる教職員の方々、友人、先輩、後輩がたくさんいて、人間不信や人と上手に話せなくなった時期があったにも関わらず、誰かに助けを求めながら生きていいんだと思うことができました。

「生きている意味」は、この先も模索し続けることになると思いますが、大学4年間で限界を決めずに、色々動いて求めてみたことで、チャペルサービスの奉仕もすることができたのだと思います。礼拝に参加している時間だけは、自分と向き合える気がして、心を穏やかにできる空間だと感じています。チャペルサービスから得るものはたくさんありますが、聖書や讃美歌を全く知らない状態でも、お気に入りの箇所や曲が見つかることと思います。1人で参加するのが不安という方やお昼休みのなにもと思う方がいらっしやるかもしれません。

でも、チャペルには、どんなあなたをも受け入れてくださる神様がいてくださいます。これまでの奉仕を通して、チャペルは温かくて落ち着くことのできる場所だと感じました。

「新しい音、新しい声」 1月16日 チャペルサービス

次郎丸智希（音楽学部音楽芸術学科 准教授）

作・編曲ゼミ担当としてフェリス女学院大学に就任させていただいて、もうすぐ1年が経とうとしております。新しい挑戦と経験の連続で、疲弊する時もありましたが、ほぼ毎週緑園キャンパスで礼拝に参加し、賛美歌を歌い、聖書のことばに触れることが出来たことで、大きな活力をいただきました。さらにはオルガン奏楽、自作の演奏や、学生から提案をいただき、賛美歌の二重唱や、ギターと聖書朗読のセッションなど、自身の創作にも刺激となる機会を多くいただけたこと、感謝の念に堪えません。

昨年11月末には、担当する『賛美歌を作ろう』という講義の一環で、チャペルにて、受講生によるオリジナルクリスマスキャロルの試演会を行わせていただきました。「作ろう」と言っても、自由に思ったように作るというのは、地図なしで見知らぬ街に立たされたようなもの。目に入る風景がどんなに素晴らしいとしても、心あらずに通り過ぎてしまえばかりです。そこで受講生にはまず、ヴェルナー作曲の『野ばら』のメロディーに、クリスマスキャロルの歌詞をつけてもらいました。「わーらべーはみーたり〜♪」と歌われるあのメロディーです。8分の6拍子が醸し出す牧歌のような雰囲気が、『きよしこの夜』などのクリスマスキャロルの世界観に通じると感じたからです。そして歌詞が完成しましたら、さらに『野ばら』のメロディーを改良し、オリジナルメロディーにするという段取りです。

試演会では、「ルカによる福音書」からイエス様生誕の箇所も朗読しながら行いましたが、受講生それぞれ、とても同じ曲を基に作ったとは思えない、オリジナリティあふれる作品が出来上がりました。教会音楽に触れてきた学生もいれば、フェリスで初めて教会の空間に足を踏み入れた学生など、経てきた道は様々ですが、各自の個性、想い、アイディア、創意、声、それらが堂内で渾然一体となり、豊かなオルガンの響きがさらに曲を豊かにし、作った本人たちも驚くような美しい創造の成果として立ち現れました。この試演会で私が目の当たりにしたのは、作曲とは無から生み出されるのではなく、先人たちの知恵を学び、味わい、そこから新しいものが生まれる連関だということです。人間の叡智や祈りが、次世代へ連綿と受け継がれていくその一端に、この授業で私も学生と共に触れることが出来ました。キャンパスにチャペルがあるという、フェリスの素晴らしい環境だからこそ実現できた、素晴らしい時間でした。

受講生には現在、『詩篇』によるオリジナル賛美歌を制作してもらっています。「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない、主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる」、『詩篇』第23篇、多くの作曲家が曲をつけている有名な「主は羊飼い」を中心に、今度は原則、基になる旋律は設定せずに、完全オリジナルメロディーを紡ぐ挑戦です。詩篇は文字通り詩であり、声に出して歌われることで真価を発揮する祈りのことばです。今少しづつ皆の中の心の旋律が解放され、助言をする私自身、楽しく新しい発見でいっぱいです。現フェリス生が紡ぐ詩篇の旋律は、次年度フェリスへの歩みの糧となるでしょう。そしてあらためて詩篇のなんと詩情豊かなことでしょう。私たちは何も欠けることなく、ただ神の導きによっている。休む時は休んでいい、憩いの水を受け取っていい。私たちは「魂を生き返らせる必要がある」のです。無から光を生み出すのは神だけがお出来ること。我々は、いつでもそそがれている光を、たえず思い出し受け止める。人智を尽してそのことへの感謝を、新しい音で、新しい声で、発信するのみなのです。

他者と共に悩む—日本とアジアの「^{はざま}狭間」での経験から



松谷暁介（金城学院大学 宗教主事／准教授）

私とアジアとキリスト教

私は20年以上にわたり中国大陸・香港・台湾といった、「中華圏」と呼ばれる地域と交流・研究などを通して関わってきました。私の父は牧師なのですが、私が生まれる頃には中国に宣教師に行きたいという夢があり、両親は「日」本と中「華」の二文字からなる「曄」という字の名前を私に付けてくれました。また私は東北の福島県福島市という地方都市の出身ですが、両親が「国際交流センター」という施設を運営していたこともあり、そこで幼少期から中国、台湾、韓国、フィリピン、ネパールなどアジアの方々に触れるグローバルな環境で育ちました。両親はアジアの中の「はざま」の距離を近づけたいと願っていたのだらうと思います。

中学時代はイギリスのロンドンに四年間住み、インド系やアフリカ系の人などに会う経験や、「黄色人」と蔑視される経験も含めて、世界には人種・言語の「はざま」があることを体験しました。高生時代は「アジアの玄関口」と呼ばれる福岡に住み、地理的にアジアを近く感じる環境でした。また大学生時代には、念願だった中国留学をし、北京に一年間住みました。言語・民族の違いのほか、戦争の歴史による感情の「はざま」があることも感じた一方で、現地の教会に通う中で中国人のキリスト者の友人ができ、こうした「はざま」を乗り越え得るキリスト教信仰の素晴らしさを、改めて感じたものでした。

日本と中華圏の「はざま」で

日本での経験：私が大学を卒業し、牧師になるための学びをする神学校に進学した時のことです。ある著名な牧師・神学者の方に「松谷君はどのような研究をしたいのか？」と尋ねられたので、「中国のキリスト教の研究をしたい」と答えたところ、その方から「亜流の神学を学ぶのはやめておきなさい」と言われてしまいました。それは、主流の欧米のキリスト教神学を学ぶようにという励ましのつもりだったのかもしれませんが、中国キリスト教を「亜流」と呼んでしまうほどに、日本のキリスト教は、アジアのキリスト教との間に距離があることを感じさせられました。

中国大陸での経験：ある著名なインドネシア系華僑の老牧師に出会った時のことです。私はその老牧師に「日本と中国の和解のためにキリスト教にはどのような役割があるでしょうか」と尋ねました。すると、それまで笑顔で話していた老牧師の表情が一変し、声を荒げて「私は日本人を見るのは腹が煮えくり返るほど嫌なのだ。日本人との和解など不可能だ！」と声を荒げて、去って行きました。後日友人から聞いたところでは、その老牧師の一家は、日中戦争期に日本軍からの被害に遭い、東南アジアに難民のようにして移住せざるを得なかったという過去を持っているとのことでした。戦後何十年経っても、越え難い「はざま」があることを痛感した経験でした。

香港での経験：私は2013～16年まで香港で在外研究に従事していました。香港は1997年にイギリスから中国に返還され、「中華人民共和国・香港特别行政区」となりました。香港は中国の一部となりながらも、「一国二制度」により高度の自

治を有していたのですが、社会の様々な面で「中国化」が強まり、若い世代を中心に「私は中国人ではなく、香港人だ！」というアイデンティティを持つ人が増えていきました。中国大陸の「中国人」と「香港人」の間の溝が深まっていく「はざま」で、第三者の私は両者に対してどのように振舞えば良いのか、戸惑うことがしばしばありました。

台湾での経験：大学生の時、北京留学を経て日本に戻って来た際、台湾人の友人と「中国語」で会話ができるようになり、嬉しい思いになりました。何かの折に、私が「台湾は中国人民共和国の一部ではなく、半ば独立した準国家ではあるけれど、文化的には中華だよね」と言った時のことです。その友人は即座に、「台湾は中華ではない！」と抗議するような口調で断言しました。確かに台湾は「中華民国」であり、彼はいわゆる「中国語」（華語）も話せる人でしたが、母語は「台湾語」であり、自分は「台湾人」であるという強いアイデンティティを持っていることを、私はその時改めて知らされました。

「はざま」でのキリスト信仰

これらの「はざま」をどう乗り越えたら良いのでしょうか。「同じ信仰・宗教を信じていれば、一つになれる」と単純に言えるものなのでしょうか。私は20年来、こうした「はざま」を経験する中で、それらを埋めたり乗り越えたりすることは容易ではないことを痛感してきましたが、イエス・キリストご自身が様々な「はざま」の中を歩まれ苦悩された方であることに思いを致すようになりました。今後、近い将来の内に東アジアのこうした「はざま」が解消されることはないでしょう。しかし、だからこそ、それらの「はざま」で自分自身も葛藤しつつ、そのただ中で悩んでいる中国大陸・香港・台湾の人々と出会い、友人となり、共に喜び、共に泣き、共に考え、共に悩むことが大切なのではないかと思うのです。

アジアの「はざま」で「For others」を生きる

フェリス女学院のキリスト教精神を表す「For others」（他者のために）という言葉がありますが、それは他者と共に歩むことであると言えるでしょう。関わりを持たない「他人」ではなく、共に歩むパートナーとしての「他者」です。

講演題に「日本とアジア」と書きましたが、日本にとってアジアは距離がある「他人」なのではなく、むしろ「アジアの中の日本」という認識を新たにすることが重要です。また、この日本の中に歴史的・文化的なアジア要素が無数にあり、また既に多くの他のアジア圏の方が日本に居住しておられることに目を向ける、「日本の中のアジア」という視点も欠かせません。

いずれにせよ、アジアを親しく感じるためにはどうしたら良いのでしょうか。私は自分の経験から、言語学習・旅行・留学をお勧めしたいと思います。確かに一定の時間とお金がかかりますが、それらには時間とお金を費やす価値があります。そして「アジアのキリスト教」に出会ってみるということです。それは、越え難い様々な「はざま」にあって、なおも希望となり得る何かを内包しているものだからです。